アートを探求

AAC Journal

AICHI ARTS CENTER

by 愛知芸術文化センター

2024 WINTER

Vol. 22

パウル・クレー《蛾の踊り》(部分)1923年　愛知県美術館

パウル・クレー展

創造をめぐる星座

2025年1月18日(土)〜3月16日(日)

パウル・クレー展―― 創造をめぐる星座

場所／愛知県美術館
時間／10:00〜18:00 ※金曜〜20:00(入館は閉館の各30分前まで)
休館日／毎週月曜日(ただし2月24日[月・振休]は開館)、2月25日(火)
料金／一般1,800円(1,600円)、高校・大学生1,200円(1,000円)、中学生以下無料
※( )内は前売券および20名以上の団体料金です。
※上記料金で本展会期中に限りコレクション展もご覧になれます。

詳細は展覧会特設サイトで！

お得な限定チケットも販売中

この展覧会はパウル・クレー・センターの学術協力のもと開催しています。

Contents

パウル・クレー展――創造をめぐる星座
名古屋フィルハーモニー交響楽団 川瀬賢太郎
とるにたりないものはなし 小栗沙弥子
劇場と演劇 〜何を作るのか？劇場〜

愛知県美術館

INTERVIEW

“孤高の画家”クレーの、知られざる交流

「この世では、私を理解することなど決してできない。なぜなら私は、死者たちだけでなく、未だ生まれざる者たちとも一緒に住んでいるのだから」

パウル・クレーのこの言葉は、1920年にクレーの作品を売り出した画廊の販売戦略に用いられて、孤独に瞑想する芸術家としての彼のイメージを広めました。たしかにクレーの作品は謎めいているかもしれません。しかし、同じ時代を生きたほかの多くの前衛芸術家たちと同様に、クレーもまた、仲間たちと刺激を与え合ったり、夢を共有したりしながら、困難な時代を生き抜いた一人の人間でした。

クレーは、人生の根源的な悲劇性と向き合いながら、線と色彩によって光を呼び起こし、抽象のなかに生命のエネルギーを描き出しました。その作品は、歴史的な文脈のなかに置かれることで、また新たな姿を見せることでしょう。本展では、スイスのパウル・クレー・センターとの学術協力のもと、クレーと交流のあった芸術家の作品との比較や、当時の貴重な資料の参照を通じて、多くの人や情報が構成する星座＝コンステレーションのなかでクレーを捉え直し、その生涯にわたる創造の軌跡をたどります。

愛知県美術館 学芸員　黒田和士

スタッフのオススメ関連本！

ART LIBRARY

クレー《大はしゃぎ》
芸術家としての実存の寓意 新装版(作品とコンテクスト)
ヴォルフガング・ケルステン／著、池田祐子／訳
三元社、2009.2、東大路道恵／カバーデザイン

20世紀前半にスイスで活躍した画家、パウル・クレーの作品《大はしゃぎ》について論じた研究書。これまでの研究を批判的に捉えつつ、詳細かつさまざまな角度から全13章で考察。

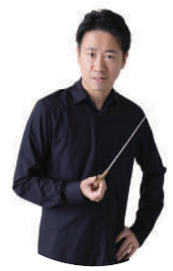
黒田学芸員

愛知県芸術劇場

名古屋フィルハーモニー交響楽団 川瀬賢太郎 音楽監督より

MESSAGE

愛知県芸術劇場は僕にとって「ホーム」の劇場で、名フィルの指揮者、正指揮者、音楽監督と、ある意味指揮者としての自分の歴史を見届けてくれている場所でもあり、何か特別なご縁のようなものを感じています。響きが本当に素晴らしく、僕が一番好きなコンサートホールです。愛知にこのような劇場があるのは、名フィルの音楽監督として自慢できることだと思っています。そんな中で2025年2月にマーラーの交響曲第6番を初めて振ります。チャレンジングなプログラムですが、このホールの響きの良さがマーラーの求めたものをさらにプラスで良くしてくれることでしょう。また、ここは立派なオペラができる素晴らしい大ホールも兼ね備えており、音楽を学ぶ若いアーティストたちが「いつかはここでオペラの舞台を！」と夢にできる劇場になってくれたら嬉しく思います。



2025年2月21日(金)・22日(土)開催

名古屋フィルハーモニー交響楽団 第531回定期演奏会「悲劇のハンマー」

場所／愛知県芸術劇場コンサートホール　時間／21日(金)18:45〜、22日(土)16:00〜
主催・お問合せ／名古屋フィルハーモニー交響楽団 ☎052-339-5666

詳細は公式サイトで！

川瀬賢太郎　指揮者・音楽監督
名古屋フィルハーモニー交響楽団の指揮者・正指揮者を12季務め、2023年4月より第6代音楽監督に就任。愛知県のみなさまと、そして名フィルと最も深い関係を築いている指揮者。

鑑賞 note

丁寧な言葉で残されたレビューを読み深めて楽しみたい。

心を揺さぶり、思考が巡る、その場でしか味わうことのできないもの。

劇場

オルガン音楽の真価　秀演

愛知県芸術劇場が誇る国内最大級のパイプオルガンを使った2つのリサイタルを聴いた。

一つはフランスの教会オルガニストとして名高いフランソワ・エスピナスのスペシャル・コンサート（8月7日）。バッハやメンデルスゾーン、フランクといったオルガン作品の大家たちばかりでなく、18世紀への変わり目から21世紀までの300年以上に及ぶフランスとドイツの作品群を俯瞰できるプログラムを抜群の技法と感性で好演した。とりわけ、普段あまり耳にすることがないグリニー（賛歌『来たれ、創造主たる聖霊よ』）、オーベルタン（ソナタ第6番）、アラン（幻想曲第2番）、トゥルヌミール（パラフレーズ・カリヨン）といったフランスの作曲家たちの作品が澄んだ軽みのある美しい響きで紹介されたことは特筆に値する。また、メンデルスゾーンとバッハの作品でも、ドイツ風の重厚さとは一味違う清々しい演奏だった。このオルガニストは早くも1996年にここで演奏しており、まだ新進だったこの人を招聘した先見の明に感心する。記録によると、その時のプログラムも、メシアンやデュリュフレ、フランクといったフランスの作曲家たちの作品で占められていた。

もう一つは神奈川県のミューザ川崎シンフォニーホールのオルガニストである大木麻理によるオルガン・アワーと名付けられた休憩なし1時間のコンサートだ（10月30日）。「音のシャワーで心リフレッシュ」のキャッチフレーズに沿って、バッハの『G線上のアリア』やラフマニノフの『ヴォカリーズ』といった名曲が大木の簡潔明快なトークとともに、小気味よく奏でられた。アンコールを含め、6曲中の4曲がドイツ系の作品だったが、リストの難曲『バッハの名による前奏曲とフーガ』は素晴らしい技巧が歯切れ良く、すっきりと仕上げられて出色だった。午後3時からと夜7時半からの2回公演で、私が聴いた午後3時からの部には高齢の夫婦連れなどの姿が多く見られた。

オルガン大国の双璧ともいえるフランスとドイツの作品をそれぞれ中心とした2つのプログラムにより、オルガン音楽の真価をベテランと中堅の名手の素晴らしい演奏で短期間のうちに聴けたのはうれしい。オルガン設置者の強みが発揮された良い企画だった。

早川立大さん　*Tatsuhiro Hayakawa*
音楽ジャーナリスト。共同通信社在職中「音楽プラリ聴きある記」執筆。音楽雑誌や公演プログラムなどに寄稿。名古屋音楽ペンクラブ創立会員。

オルガン・スペシャルコンサート
© Kosaku Nakagawa

オルガン・アワー

フランソワ・エスピナス　オルガン・スペシャルコンサート
2024年8月7日（水）

オルガン・アワー ～音のシャワーで心リフレッシュ～
2024年10月30日（水）

場所／愛知県芸術劇場 コンサートホール

美術館

認識を裏切りつつ、他者との繋がりを回復する椅子たち

椅子、テーブル、ベッド、箪笥（たんす）。生活の基盤を構成する家具の中でも、椅子は最も多様なかたちでどこにでも置かれ、また長く私たちの身体に触れるものである。それが突如として意味と機能を失い、私たちの目の前に現れたとしたら…。日々の暮らしのなかで慣れ親しんでいるからこそ、椅子たちは見知らぬ姿を開陳し始める。ゆったりとした寛ぎと苛烈な拘束具、温かな生の証と不穏さの漂う不在、権威としての玉座と社会の構成員としての存在といった、まるで相反するさまざまな要素が、「椅子」を通して浮かび上がってくる。

革張りのソファで、一人の少女が眠りに落ちている。その身体には毛布がふわりと掛けられている。ハンス・オプ・デ・ビークの《眠る少女》（2017年）は、子どもの無防備な寝姿が実に愛らしい作品である。しかしソファと一体化して灰色になった少女は、生前の姿を刻み込んだヨーロッパの墓碑彫刻を思い起こさせもする。柔らかなはずの少女とソファがある一瞬で凝固したかのような姿は、温かく守られていた幼少期へのノスタルジーと少女の身にさえ忍ぶ微かな死を連想させる。

対して、ローザスの《Re:ローザス!》（2013-2024年［継続中］）では、椅子は生きた身体の舞台である。その小さな領域で、多様な時間、地域、年代に属する人々の生が展開される。脚を組む、髪をかき上げる、胸を押さえる、うなだれる一椅子に座ったまま繰り返されるシンプルな動きは、社会規範のなかで抑圧された無意識の反応のようである。しかし広場で、ダンススクールで、一人の部屋で繰り広げられる同じ動きの集積は、場所と時間を超えて孤立した人々を結びつける。個としての一脚一脚の集積が、ゆるやかな共同体を形成するのである。

本展で特に印象的だったのは、美術館のある愛知芸術文化センターのパブリックスペースで《Re:ローザス!》を行ったパフォーマンス映像が、展示に加えられていたことだ。部屋から飛び出した椅子たちは、美術館の展示室でさまざまな形態や記号に姿を変えるが、その時・この場に集まった人々が椅子のうえで展開した個別の身体によるパフォーマンスが、展覧会に血を通わせているように思われたのだった。

能勢陽子さん　*Yoko Nose*
キュレーター。前豊田市美術館学芸員。担当企画に「ホー・ツーニェン 百鬼夜行」（2021-2022年）、「ねこのほそ道」（2023年）、「未完の始まり」（2024年）など。「あいちトリエンナーレ2019」キュレーター。

ハンス・オプ・デ・ビーク《眠る少女》2017年
タグチアートコレクション／タグチ現代芸術基金
© Studio Hans Op de Beeck

ローザス《Re:ローザス!》
2013-2024年（継続中）、
展示風景 Courtesy of Rosas

アブソリュート・チェアーズ　現代美術のなかの椅子なるもの
2024年7月18日（木）～9月23日（月・振休）
場所／愛知県美術館

AACのWEBサイト・SNS・音声メディアでは芸術を気軽に楽しめるコンテンツを配信！
こころのおやつ AACタイム by 愛知芸術文化センター
WEBサイトをチェック　aactime.aichi.jp
インスタをフォロー　@aichigeibunaactime
ポッドキャストをきく　愛知芸術文化センターのアートがもっと好きになるラジオ

© Naoshi HATORI
© Ambra Vernuccio

赤ちゃん参加型から世界で人気の公演まで 2025年もたくさんのダンスが登場

愛知県芸術劇場では、今年に続き25年も、多種多様なダンスをお届けします。赤ちゃんと親子で楽しめるワークショップや、国内外のバレエ団による公演、英国の世界的振付家アクラム・カーンが手掛ける地球上の生き物のつながりにメッセージを込めた『ジャングル・ブック』、芸術監督がプロデュースする岡田利規演出のコンテンポラリーダンス作品など、ダンスが目白押しです。内容・チケット情報は当劇場WEBサイトで随時発表。

詳細は公式サイトで！

News お知らせ

12月から半田市立博物館で開催！ 愛知県美術館　移動美術館2024

愛知県美術館は、より多くの県民のみなさまにコレクションをご覧いただくため、県内各地に作品を運んでの「移動美術館」を毎年開催しています。初めて半田市で実施する今回は、「本当の本物の現実」をテーマに、高橋由一や桂ゆきなど、近代から現代までの国内や国外の絵画を中心に約20点を展示。美術における多様な「現実」の世界をお楽しみいただければ幸いです。会期中には記念講演会やギャラリートークも行います。ぜひ会場へお出かけください。

移動美術館の詳細はこちら！

もっと知りたいアート専門の図書館
ART LIBRARY
（愛知芸術文化センター1F）

12月から1月にかけて、アートライブラリーでは毎年「年末年始」に関連した資料を展示しています。クリスマス、大晦日、お正月に関する資料はもちろん、2025年の干支・巳にゆかりのある資料も展示します。

デザイン／神谷直広、髙木若菜（株式会社Rand）
編集／村瀬実希（MAISONETTE Inc.）、Re!na
印刷／長苗印刷

© 愛知県芸術劇場2024　※本誌記事・写真・レイアウトの転載を禁じます。　※本誌に掲載している価格は、原則的に消費税込みの価格です。
※掲載内容は2024年11月15日（金）現在のものです。展覧会・公演の内容を変更、または開催を中止する場合があります。

2024年12月1日号　Vol.122　発行・お問合せ／愛知県芸術劇場（公益財団法人 愛知県文化振興事業団）☎052-955-5506　e-mail／mkt@aaf.or.jp（広報グループ）

Theater

劇場

劇場と演劇 何をつくるのか？劇場

回路をつくり、機会であり続けること

現在、天井改修のために、宮崎県立芸術劇場はクローズしております。

もともと広い宮崎県の中で、なるべく、県内各地の市町村でも作品を上演したり、関連企画を実施する、ということをやってきましたが、ここ1～2年は、そのことをより意識的に行っています。

上演する作品をつくること、県民に観ていただく作品を招聘すること、ワークショップなどで多彩な実演家のみなさんとの時間を創出すること。その他にも、「なんちゃって演劇史」や「ぶっちゃけ演出論」「戯曲を読み解く！」という講座など、なるべく間口を広げて"劇場"に通う習慣がない方々にも興味を持っていただけるように努めてきました。実際に、これらの座学を通して、劇場に初めて接し、舞台を観に来てくれるようになった方がたくさん生まれましたし、顔の見える観客になってくださっています。

他にも、とても素朴な企画ですが、劇場自体が、地域に出ていくということもやってきました。地域に劇場スタッフが出て行きヒアリング、ここで何をどういう風にすれば、県民のみなさんに楽しく巻き込まれてもらえるか？を検討します。あるときは「のべ、まど」という企画で、日南市にある「油津商店街」というところに出て行きました。オリジナルのマップを作って、参加者と商店街を歩きながら写真を撮るツアーを行い、そこで撮ってきた写真の中から1枚選んで4コマ漫画を描いてもらうという内容です。商店街の方々に協力してもらい、ツアーの中では、商店街で働くみなさんにお話も伺いました。

後日私が参加者の作品から一つの台本を書き、参加者とショーイングを行いました。この事業で、①商店街の人々、②商店街のツアーに参加してくれた人々、③ショーイングのワークショップ参加者とそれを観に来てくれた人々、この3方面の方々が、新たに「油津商店街」に出会い、宮崎県立芸術劇場に出会ってくれたのでした。

「知ることを通して知ってもらう」機会にもなりました。

このように、地味かもしれませんが、私という劇作家、演出家である実演家がいることで、実現できるプログラムを劇場職員とよく打合せしながら計画してきました。

宮崎県立芸術劇場の演劇ディレクターに就任したのは、2015年10月でした。

実は、私は宮崎県立芸術劇場がオープンしたときから通っていて、高校生の頃には、宮崎県立芸術劇場のプログラムを組む人間になりたいと思っていました。

「劇場と演劇」について考えたとき、「演劇作品をつくる」「上演する」「観てもらう」この3点を考えれば一番想像しやすいように思います。しかし、このわかりやすい関係性だけでは、地域の「劇場と演劇」を考える上で、興味のある人だけの「閉じた状態」になる可能性が高いです。地域の劇場として、演劇に何ができるか？それを考えながら演劇ダンスのプログラムを立ててきました。

つまり20年経って、育ててもらった劇場に帰ってきたような感じです。

私がプログラムを組む人間になりたいと思ったのは、中高校生のときに、周りに、劇場に通う人、関心を持って劇場に行く人が全然いなかったからです。足を運ぶきっかけさえあればと思っていましたし、特に専門家がプログラムを組み、長期的なスパンで劇場と人々の出会いをデザインするべきだと思っていたからです。

どうやってソフトを考えていくか劇場自体が考え続けられることが大切だと思います。

幅のある作品群を観てもらい、県民自らも積極的に劇場に関わるデザイン。回路をつくり、劇場との出会いを多数用意して、劇場自体が「機会」となり、人と人が出会ったり、作品と人が出会うこともあるかもしれない。そのような出会いをつくり出していくことが重要であると思います。

宮崎の特色として、劇場に実演家がついてプログラムの充実を図るというのがあります。私は20年かけて宮崎県立芸術劇場の演劇ディレクターに就任しましたが、私の前には開館するときに宮崎で活躍されている劇団ぐるーぷ連の実広健士さんがプログラムに関わっており、その後劇団こふく劇場の永山智行さんが演劇ディレクターに就任されました。私は、実広さん、永山さんの流れを組んで、演劇ディレクターという立場で劇場に関わってきました。私が通っていた頃のプログラムは実広さんが行っているので、私は演劇に対する感性と教養に関して、実広さんのプログラムや、宮崎県立芸術劇場で大いに学んだという意識があります。

劇場に実演家がいることで、劇場の顔も見え、長いスパンをかけて演劇を観る側つくる側の機会をデザインしてきたと言えます。

回路をつくること、そして機会でありつづけることで、長い時間をかけて、人をつくっていくことが劇場にはできると感じています。

MORE THEATER

立山 ひろみ
宮崎県立芸術劇場 演劇ディレクター

劇作家、演出家、ニグリノーダ主宰。東京学芸大学芸術学演劇専修卒業後、劇団黒テントに入団し演出デビュー。退団後、個人ユニットのニグリノーダ旗揚げ。主な作品に日生劇場音楽劇『あらしのよるに』、オペラシアターこんにゃく座『ルドルフとイッパイアッテナ』など。

スタッフのオススメ関連本！

© 新曜社

ART LIBRARY

街に出る劇場　社会的包摂活動としての演劇と教育
石黒広昭／編　新曜社、2018.7

地域の人々と演劇活動を結び付けている実践例から、演劇が持つ人間の成長への可能性へアプローチした書籍。劇場、演劇、教育といった多彩な視点・立場から、実践例を紹介。

愛知芸術文化センター管理課 アートライブラリー担当
三上昂良

navigator's COLUMN

国際芸術祭「あいち2025」のキュレーターやスタッフがナビゲート。アートの多様性を「あいち」から発信します。

2010年から3年ごとに開催してきた「あいち」の国際芸術祭は、次回ではや6回目！ 初回はアシスタントキュレーターとして長者町を駆け回っていた私も、いつの間にかプロジェクトマネージャーに…。初めて海外から芸術監督を招く「あいち2025」では、これまでに比べ、中東やアフリカ、中南米出身のアーティスト、そして女性アーティストの割合がグンと増えた印象です。キービジュアルに漫画家を起用するのも、アル・カシミ監督のアイデア。愛知芸術文化センター、瀬戸市のまちなかと愛知県陶磁美術館が会場となり、一味も二味も違う芸術祭になること間違いなし！ どうぞお楽しみに!!

国際芸術祭「あいち2025」プロジェクトマネージャー　**副田一穂**（愛知県美術館主任学芸員）

2025年9月13日（土）～11月30日（日）［79日間］
国際芸術祭「あいち2025」
芸術監督／フール・アル・カシミ
テーマ／灰と薔薇のあいまに
主な会場／愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなか

Art Museum

美術館

INTERVIEW

とるにたりないものはなし

小栗沙弥子

聞き手／愛知県美術館 主任学芸員　塩津青夏　　撮影／千葉亜津子

Sayako Oguri
小栗沙弥子

1978年岐阜県生まれ、岐阜県在住。愛知県立芸術大学美術学部で日本画を、研究生として油画を専攻し、版画の研究室に所属。ガムやチョコレートの包み紙として用いられている銀紙を細く割いて板に貼り付けるシリーズや、日々の生活で出たり拾ったりした紙ゴミを組み合わせた立体物のシリーズは、いずれもコラージュの原理を用いている。「あいちトリエンナーレ 2010」に参加。13～14年ポーラ美術振興財団在外研修員としてタイ滞在。19年レジデンスアーティストとしてブラジル滞在。

芸大で日本画を学び 現代美術という新境地へ

塩津（以下、塩）　愛知県美術館は、これまでに小栗さんの作品20点を収蔵しました。現在の作風に至るまでに、愛知県立芸術大学で日本画、油画、版画を専攻し、さまざまな経験をされていますよね。現在の制作にもつながる、バックグラウンドからお聞かせください。

小栗沙弥子（以下、小）　日本画の画材屋さんって基本的に静寂で、それがストレスでした。絵を描くまでに時間がかかり、油画の先生や友人と話す方が楽しかったから私には合ってないのかなと思い始めたのが大学3年生のころです。その翌年に横浜トリエンナーレが開催され、ボランティアに参加して「現代美術は魂の解放だ」と衝撃を受けました。日本画をやっている場合じゃないなと思って油画の友人に相談したら、版画の先生を紹介していただき、研究生として所属することに。コラージュを版とするコラグラフ版画は楽しかったのですが、プレス機のサイズの制約などもありましたし、版をそのまま見せた方が面白かったりして刷る必要がなくなってきました。素材はその辺にある日常のもので、ホームセンターでシャンプーと一緒に買うくらいがちょうどいいと、そのころから意識が変わったように思います。

塩　芸大時代の課題などで、思い出深いことは何かありましたか。

小　「物言う事象」という課題で、学校にあるものを集めて小さいものから大きいものに並べたことは、違う筋肉を使ったみたいな感じでした。ゴミでちりとりを作ったら、講師の渡辺英司さんが褒めてくださったんですよ。言ってしまえばゴミ箱を裏返したようなもの。家で身の回りのものを使って作ることはあっても、それを公に出すのは初めてでした。この作品をきっかけに、私も美術をやっていけそうだと展望が見えたのはすごく大きかったです。

《渚》

観る人なくして成立しない 不要なものから生まれる作品たち

塩　このようなコラージュの作品は他にもあって、収蔵作品の《渚》もそうですね。小栗さんは銀紙を使うことが多い印象ですが、いつからの取り組みでしょうか。

小　私はロッテの梅ガムが好きで（笑）、銀紙に包まれているんですよ。そこには「かんだ後は紙に包んでくずかごに捨てましょう」と注意書きがありますが、仰々しく金箔を貼るよりも、捨てられる銀紙を使った方がきれいで面白い気がして、実験的試みで使ったのが最初。あいちトリエンナーレ2010の展示では、会場が昭和の趣の自然光が入る部屋だったので、壁一面を銀紙にしてみました。銀紙といっても色がまちまちで、順番に貼っていくと個体差があります。キャンバスや板などに貼ることもあるわけではなく、いろいろなものに貼ってみようかなと。

塩　それを肩肘張らずに作られるなかで、行為の集積性みたいなものも最終的には感じられなくなっている気がします。何をもって作品として成立させようとしているのでしょう。

小　手に入るものをただ使うというか、制作するときは作品として成立させようという意識はそこまでないですね。いつも思うのは、私の作品は結果的に見たらみんな乾いていて、まるで煮干しやスルメのよう。最初から乾いた素材を選んでいるのもありますが、油絵のようなウェット感が一切なくて軽いです。それが不要とされるゴミが持っている特性なのかもしれません。作ったものを後から振り返ることもなければ執着心もない。劣化する素材ではあると思うんですけど、ものとしては劣化はしてない。劣化してからが本筋なんじゃないかな。私が、というよりも、観た人が価値を見出してくれるので、その瞬間に劣化ではなくなるように思います。人々が発見するんだな、みなさんありがとうございますという気持ちです。

取材は岐阜県のアトリエにて。「自分の部屋を人に見せるのはどうかなと思うんですけど、『展覧会よりも作っているときの方が面白いよ』って、同じアトリエの子が言ってくれたことがあって。それを記録として残してもらえるなら」と小栗。

国境を越えて得られた多角的な視点と発見

塩　ここにたくさんある木枠のような作品、《飾り》はどのようにして生まれた作品ですか。

小　これらはタイに1年ほど滞在していたときに生まれた作品です。まちに落ちている不要なもので制作する予定でしたが、驚くほどきれいなまちで正直困りました。いいホームセンターにも出会えず、画材屋さんで手に入れた木枠を展示台の脚にしました。展覧会を終えたタイミングで彫ってみたら意外と良くて、それがのちに作品になったという経緯です。絵を描いている子にあげたら喜んでもらえて、ブラジルに行ったときには「腕みたいだ」と言われ、独特な感性で捉えてくれたことがうれしかったです。

《飾り》

塩　《地面を壁を歩く》という作品は、日課の散歩から着想されたそうですね。

小　そうですね。これは版画をやっていたときにも言えることですが、歩きながら見える道や家、景色すべてが作品のはじまりになっています。《地面を壁を歩く》に関しては、ブラジル滞在中にタイトルをつけました。サンパウロのまちって碁盤目状ですが、高低差があるんです。すっと行けると思ったらものすごく時間がかかる。そんな予想外の出来事が多々あって、イメージした状態とのギャップが面白かったです。あるとき、位置情報を知るためにGoogleマップで調べたことで、上から俯瞰している状態に目を向けるように。視点が2つ以上になったことから《地面を壁を歩く》と名付けました。多くの人は建物や部屋、間取りに見えるそうですが、まったくその意識はないですね。鼻歌を歌いながら、テレビを見ながら作るくらいがちょうどいい。頑張ろうと力まないことが大事。キッチンで何かをつまみながら制作することもあり、部屋のあちこちで作っています。

《地面を壁を歩く》